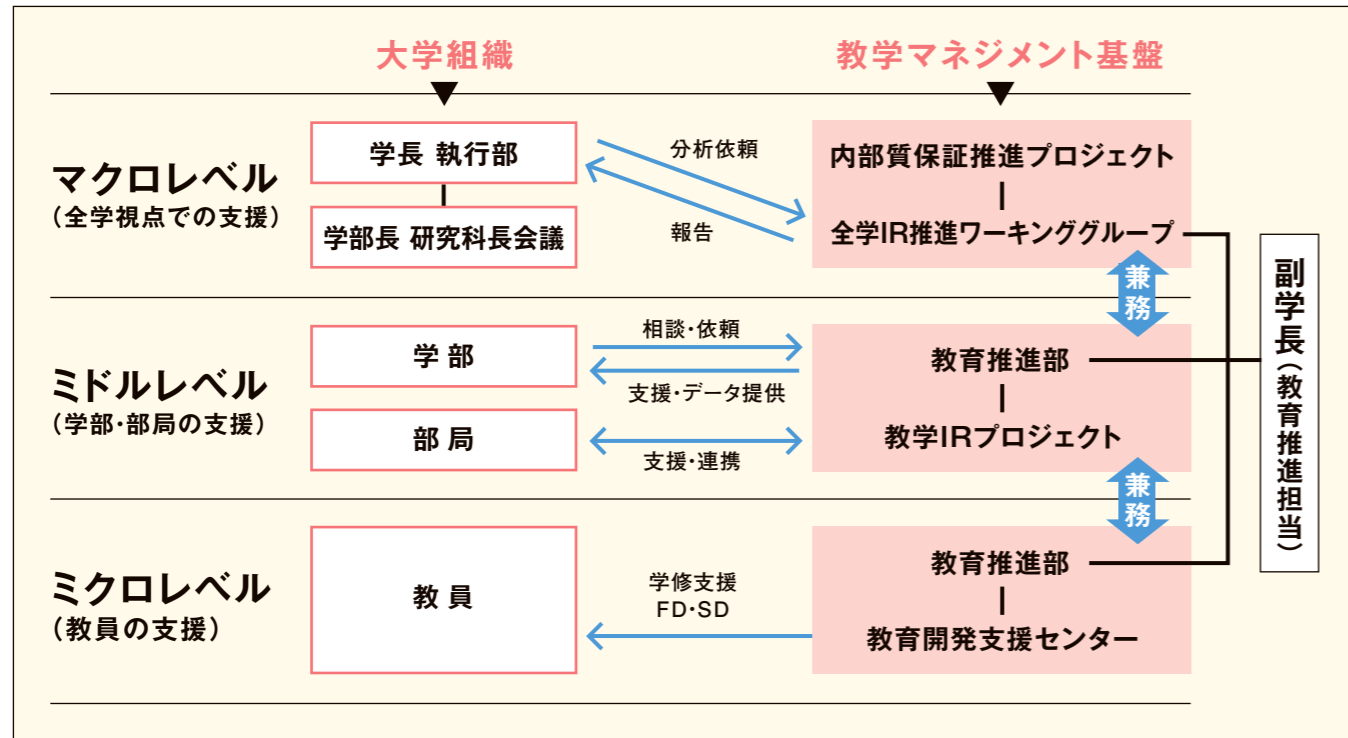




学生数/約29300人  
 学部/法、文、経済、商、社会、政策創造、外国語、人間健康、総合情報、社会安全、システム理工、環境都市工、化学生命工  
 大学院/法学、文学、経済学、商学、社会学、総合情報学、理工学、外国語教育学、心理学、社会安全、東アジア文化、  
 ガバナンス、人間健康  
 ▶THE世界大学ランキング2021/1001+位、同日本版2021/75位

### 教学マネジメント推進体制図



### PDCAを回す工夫

授業科目レベル	学位プログラムレベル	大学全体レベル
▶授業アンケートの結果を教員に共有。教育開発支援センターがディスカッションベースで教員とコミュニケーションを取りながら、教育内容・方法の改善を支援する	▶教学IRプロジェクトが、データ分析のサンプル集を作成。各種データの活用方法を具体的に示し、学内に共有することで、分析依頼を促進する	▶執行部の意思決定に必要なデータを、先読みして職員が準備。適切なタイミングを計って、意思決定者に共有する

**注目!** DP達成度を学生にフィードバックし、主体的な学修を促す

教学IRプロジェクトが実施する調査の結果は、教学IRで活用するだけでなく、主体的な学修を促すために学生個人にもフィードバックしている。2019年度から本格稼働した「フィードバックシート」に学生はスマホやパソコンからアクセスして、自分の回答結果を確認する。シートには、関西大学の教育目標である「考動力」を規定する5つの力(自律力・人間力・社会力・国際力・革新力)とリテラシーの6項目がレーダーチャートで表示されており、自分の値と学部平均値とを比較することで、自分の強み弱みが把握できる。学修や科目履修に関する学部からのアドバイスも掲載されている。2020年度からは、入学時調査を紙からWebに切り替えることで、数日での返却が可能になっており、履修登録前に学生が結果を確認し、科目の選択などに役立てている。

フィードバックシート(パソコン版)

## 教職協働組織でつなぐ 三層のPDCAサイクル

### 関西大学

各階層のPDCAサイクルを有機的につないで教育の質向上に取り組んでいる関西大学。教学IRの担当職員に、教職協働でPDCAサイクルを機能させる工夫を聞く。



教育開発支援室・教学IR室 主任  
**川瀬 友太**  
 かわせゆうた ●2009年学校法人関西大学入職。授業支援グループ、教務事務グループ、スポーツ振興グループを経て2018年より現職。

**分析から改善までをシームレスにサポート**

本学では、マクロ(全学)、ミドル(学部等)、ミクロ(教職員)の三層でPDCAサイクルを回し、重層的に教育の質向上に取り組んでいます(左ページ図参照)。マクロレベルでは、認証評価で重視される内部質保証の確立などを、ミドルレベルでは学部で設定した教育目標の達成などを、ミクロレベルでは授業内容や授業方法の改善などを質向上のテーマとしており、その実現を推進・サポートする体制もレベルごとに整えています。しかし、各レベルでPDCAサイクルを自己完結させているだけでは、効果的な改善は望みません。マクロレベルの課題を解決するにはミドルレベルでの改善が、ミドルレベルの施策の効果を高めるにはミクロレベルでの改良

が必要になるからです。そこで本学では、ミドルレベルに位置する「教学IRプロジェクト」が大きな役割となり、三層の連携・協力を円滑に進める体制をとっています。

同プロジェクトは、2014年度に設置された教職協働・学部横断型の組織です。入試や教務、キャリアセンターなどから集まった21人の教職員で構成されています。ミドルレベルの学部支援が活動の中心ですが、マクロレベルの「全学IR推進ワーキンググループ」や、授業改善の支援を行う「ミクロレベルの「教育開発支援センター」」との兼務者もおり、「人」を介して各階層とつながっています。そのため、例えば学部で明らかになった課題に対して、教育開発支援センターとシームレスに情報共有を図り、FDや改善提案を行うことができます。また、この3つの組織のトップは教育推進担当副学長が務めており、組織間の連携もスムーズです。

**データ活用で得られる利点の共有から始める**

三層を縦につなぐ連携は「人」がキーですが、部局と教学IRを横につなぐ連携では、「データ」がキーになります。教学IRプロジェクトでは、DPのベースになっている「考動力」の達成度を2015年度から学生調査を実施して測っています。入学時と卒業時は全員を対象に記名式で調査を行うので、GPAや履修状況などのひも付けができます。

しかし、こうしたデータを持っていても、それぞれの現場が分析の必要性を感じなければIRの出番はありません。経験上、データの活用を現場に浸透させるには、小さくてもよいので、データで何がわかるのかといった手心えを共有することが大切です。この最初の1歩はハードルが高く大変ですが、1つでも利点が伝われば、定例の報告会やデータ提供の依頼などが徐々に増えていきます。

私は、学生の学びや教員の教育活動をデータを活用して支えることが、職員の重要な役割の一つだと考えています。多くの場合、教員は任期付きで大学運営に関わりません。だからこそ職員は、長期的な視点を持って必要となるデータの提案や分析報告をすることが欠かせません。それには、私たち職員が学生や大学、社会の状況を今以上に理解し、将来展望をしっかりと描く必要があるでしょう。

\*自ら考え行動する力